

困窮

「ひとりごとじゃない」

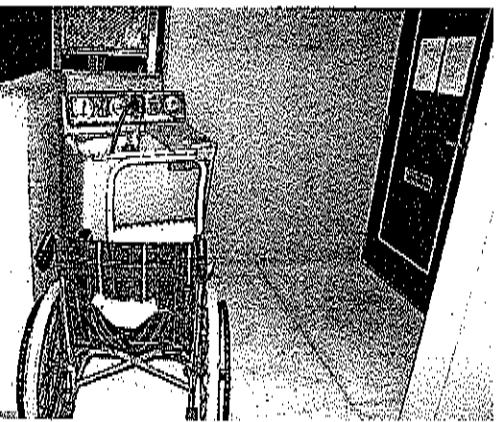
福祉の枠外地域の「ひと」と「ひと」に

10年前の2011年1月

大阪府豊中市のマンシ

ヨンの一室で、63歳の61歳の姉妹の遺体が見つかった。所有する不動産を差し押さえられ、困窮の末、娘死や病死したとみられる。

一帯は福祉ボランティアの活動があまりしている地域として知られていた。それでも人の窮屈さ、誰も気付いたがちなかったのはなぜか。「高齢」や「孤独」、「孤獨」といふ言葉が使われない



姉妹の遺体が見つかった部屋の前には、車いすと洗濯機があった。ドアに行政への相談を勧める地元執行官の手紙が張り出されていた=2011年1月、大阪府豊中市

活動が必要ではないか。地元の社会福祉協議会が対策に乗り出した。

中心になつたのが、現在、社説で福祉推進監事をつとめる勝部慶子さんだ。路大震災をきっかけに、25年以上、「孤獨死」の問題と向き合つてきた堺城福祉のスペシャリスト。NHKドラマ「サイレント・ブレイク」がひきなかつた「孤獨死」や「孤独死」といふ言葉が使われるようになった。それが、何よりも気付いたといふ。

「まさか」「制度のはまことにいる人が死んだ」と勝部さん。年齢や世帯人口で見守りの対象がどうかを決める難題ではない

「いい人の」とは近所の人たちも知らない。そういう人たちの中に困っている人がいるはずだと考えた。

ある女性は「お金がない」と困っていた。よく聞けば「ATMの使い方がわからない」と書く。認知症が進んでいたりとかわ

り、支障につながった。地域の人たちの「発見力」が、勝部さんら「ハービニティン・シャルワーカー」の「解決力」が車の両輪だ。「活動のなかで、共働きをきづけたりお互いができたケースは少なくあります」と語る。

「2人孤獨死」が広がりつつある背景に、「人間関係の貧困がある」と勝部さんは指摘する。「困った人を見捨てる社会は、自分も見捨てられる社会。老人介護も、認知症も、80歳の問題も、一人ひとりがひとりひとりと思わなくなれば、声はあがめやすくなってしまう」と心配だ。

困窮から「公園にホームレスの人が増えている」と連絡をもらい、支援につなげよう。現場を訪れてみると、「自分よりもっと大変な人が助けられてあげてほしい」と「会社を倒産させた自分が悪い」という声が返ってくる。勝部さんは「困る」と「自分よりもっと大変な人が助けられてあげてほしい」と「会社を倒産させた自分が悪い」という声が返ってくる。勝部さんは「困る」と「自分よりもっと大変な人が助けられてあげてほしい」と「会社を倒産させた自分が悪い」という声が返ってくる。その状況は本人のせい、どちらだ」と書く。認知症の中は「自己責任論」が世の中を痛めている」と書く。

加えて「ロロナ」との外由良講で地域の見守り活動が制限され、「地域の団」が弱まっている。「ロロナ講が壊れて、気がつかば孤獨死が大変な数になってしまた」という可能性は十分にある」と心配だ。



豊中市社会福祉協議会の勝部慶子さん。コロナ禍で相談窓口はアクリル板越しの対応になっていた=2021年3月、大阪府豊中市、東洋美術館